

る。まだ6月であり、しかたないだろう。ウェディングシューズだと、地下足袋と違って、そう冷たく感じない。

さらに進むと、3段20mの滝が現われる。岩はすべりやすく、水がまだ冷たいので、多少いやらしい。しかし、3段になっているので、危険はない。この滝を過ぎるあたりから沢は極端に細くなり、源頭の様相となってくる。20分程登ると、水は濁れてしまい、10分程のヤブこぎで登山道に出る。左沢に入って1時間15分で登山道に出たことになる。まだ気温も低く、そそくさと甲子温泉に下る。

(記・

[タイム] 白水沢出合(7:05)→右俣分岐(8:00, 8:10)→右沢分岐(8:20)→登山道(9:35)

一里滝沢三ノ沢 1985年6月8日

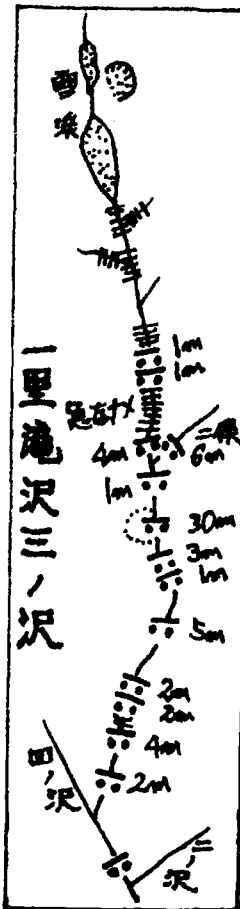
阿武隈川源流を構成する支流の一つである一里滝沢は、上部で4つの支沢に分かれる。ここでは、下流部より一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢、四ノ沢と仮称することにする。このうち四ノ沢・二ノ沢および一ノ沢の遡行記録は、会報No 6およびNo 19に収録した。今回は三ノ沢の記録を紹介する。

いつもの通り甲子温泉の少し手前にある道路わきの空地に車を置いて出発。林道をたどったあと、阿武隈川本谷を少し下降して一里滝沢出合へ。

7:15遡行開始。一里滝沢は、出合すぐに滝をかけ、沢筋は暗く、出だしの雰囲気は実にいい。ところがこの一里滝沢というのは、最初の滝を越えるとあとは平凡になってしまい、上流になって、いくつかに分れた支沢のうちには大きな滝をかけるものもあるが、二ノ沢のごときは最後まで平凡なまま終わってしまうのだから、くせものである。さて、今日の目的である三ノ沢はどうであろうか。

9:10三ノ沢出合。左の四ノ沢に比べると貧弱の感は否めず、果して滝が出てくるだろうかと気にしながら出発。

まもなく4mの滝が出てきた。ホールド豊富で簡単に越える。そして、次々に小滝。いくつもの沢を経験した者にとっては、まあ平凡でないというだけのものかもしれないが、果



して滝があるだろうかという不安を抱いていただけに、まずは上々の首尾といわねばならない。

やがて30mの滝に出る。この沢最大の滝である。上段は階段状で、下段は若干ハンク状となっている。岩はモロく、ちょっと取り付けない。右岸から捲き、樹林帯をトラバースする感じで滝の中段に出て、登る。このあとすぐ二俣となった。左俣ヘルートをとる。

二俣から先は、もう滝はかからない。そのかわり、ナメが断続するようになる。もっとももう源流に近いから、ナメだといっても、爽快感はない。

やがて雪渓が出てきた。ウェディングシューズを雪面に蹴りこむようにして登る。こんな時には地下足袋より便利である。

間にガレ場をはさんで、もう一つ雪渓。これを越えると、もう沢筋は消え、ヤブこぎとなる。20分程で稜線の登山道に出た。笠松のある所であった。

(記・

[タイム] 出合(7:15)→三ノ沢出合(9:10)→二俣(10:00)→終了(10:55)→稜線(11:15)

加藤谷川流域の沢

加藤谷川は、那須の西面を流れる阿賀野川の支流の一つである。昨年が続いてこの地域の沢の遡行に積極的に取り組んだので、会報No. 23の記録と合わせ、参考にしていただきたい。

旭沢(仮称)右俣

1985年8月24日

L

8:00遡行開始。旭沢(仮称)の二俣付近では砂防ダムの工事が行なわれていた。そういえばこのあたり、山肌のあちこちが崩壊している。

旭直沢(仮称)の出合でちょっと勘違いをしまして、旭沢右俣に入るのに少し手間取ってしまった。

右俣に入ると、すぐ10mの滝。右岸から小さく捲いて越す。それに続いてまた10mの滝。ここも右岸を捲く。このあたりあちこちガレているので、通過にも注意が必要だ。